

氏名	福武 まゆみ
授与した学位	博士
専攻分野の名称	看護学
学位授与番号	博甲第131号
学位授与の日付	令和2年3月24日
学位論文の題目	高齢者における配偶者の死に備えての準備に関する研究
学位審査委員会	主査 荻野 哲也 副査 二宮 一枝 副査 實金 栄 副査 山本 登志子 副査 村社 卓

## 学位論文内容の要旨

本論文は、配偶者を喪失した高齢者が、住み慣れた地域で、人生の最期まで生活できるための支援に資する基礎資料を得ることをねらいとして、高齢者における配偶者の死に備えて準備すべき内容と準備行動に影響する要因を明らかにすることを目的とした。

上記の目的を達成するために、研究1として、配偶者を喪失した高齢者を対象として死別後に困ったことや生前から行っていて助かったことなどを聞き取り、配偶者の死に備えて必要となる内容を明らかにする。次に、配偶者の死別後の生活への適応のために、研究2として、配偶者の死後の生活への自信と研究1で明らかとなった内容の実践状況との関連を明らかにする。最後に研究3として、研究1で明らかになった、配偶者の死に備えて必要となる内容を実践することが、死に備えての準備につながるか検討するために、両者の関連を構造方程式モデリングで検討することとした。

まず、第1の課題を達成するために、配偶者を喪失した65歳以上の女性4名を対象とし、実施していた準備状況と必要と考える配偶者の死に備えての準備内容についてインタビューを行い、質的帰納的に分析した。分析の結果、実施していた準備では、26の2次コード、13のサブカテゴリー、5つのカテゴリーが抽出され、「病気の時の準備は考えられない」や「将来の話や死への準備は先延ばし」にしており、「準備はしていない」ことも明らかとなった。また、必要と考える配偶者の死に備えての準備内容では、26の2次コード、14のサブカテゴリー、7つのカテゴリーが抽出され、「家族・友人・仕事・趣味や性格が立ち直りに影響」や「生前依存していた事項の困りごと」が抽出され、友人や近隣との良好な人間関係の構築や日常生活での自立が必要であることが明らかとなった。

次に、第2の課題を達成するために、A県の老人クラブに所属する高齢者に対して無記名自記式質問紙調査を実施し、基本属性（性別、年齢、家族構成、自身の健康状態）、日常生活における役割状況、精神的頼り状況、人間関係、配偶者が亡くなったことを想定しての自信について回答を求めた。回収した調査票は、401名であり、そのうち、役

割状況と生活への自信におけるすべての項目に欠損のあるものは除外し、334名を有効回答として分析を行った。分析は、生活への自信の有無と健康状態、日常生活における役割状況、人間関係について男女別に $\chi^2$ 検定を実施した。結果、年齢および家族構成では、生活への自信の割合に違いはなかった。男女ともに、生活への自信の割合に違いがあった項目では、健康状態が良い人 ( $p < 0.01$ )、精神的に頼っていない人 ( $p < 0.05$ )、友人との付き合いがある人 ( $p < 0.05$ ) であった。男性における生活への自信では、近所との付き合いがある人 ( $p < 0.01$ ) において自信がある割合が高かった。女性では、印鑑・通帳管理で頼っていない人 ( $p < 0.01$ ) において自信がある割合が高かった。以上より、他者との人間関係を持つことや精神的に自立すること、日常生活において自立することは、配偶者の死別後の生活への自信につながる事が明らかとなった。

最後に第3の課題を達成するために、A県の老人福祉大学を受講している高齢者864名を対象として自記式質問紙調査を実施し、基本的属性、1. 日常生活の自立 (3領域、15項目)、2. 周囲との関わり (3領域16項目)、3. 配偶者の死に備えての準備 (7項目) について回答を求めた。回収した調査票586名のうち、配偶者がいない者166名と測定項目に3つ以上欠損のある者16名を除外し、404名を分析対象とした。分析方法は、3つの調査項目それぞれに対して探索的因子分析・確認的因子分析を実施し、それぞれの調査項目についてモデルの適合性を検討し、最後に、日常生活の自立と周囲との関わりと配偶者の死に備えての準備との関係を構造方程式モデリングで確認を行った。結果、日常生活の自立は、「家事」「財産管理」「環境調整」の3因子に、周囲との関わりは「交流」「参加」「相談」の3因子に、配偶者の死に備えての準備は1因子が抽出された。これらの結果に基づいて、確認的因子分析を実施した結果、日常生活の自立については、CFI=0.977、RMSEA=0.062、周囲との関わりは、CFI=0.925、RMSEA=0.073であり、それぞれ3因子二次因子モデルが構築された。また、配偶者の死に備えての準備はCFI=1.000、RMSEA=0.000であり1因子モデルが構築された。最後に仮想モデルを使用して構造方程式モデリングによる分析を実施した結果、日常生活の自立は他者との人間関係を介して間接的に死に備えての準備と関連していた (CFI=0.915、RMSEA=0.050)。

以上より、配偶者の死に備えて準備すべき内容は、他者との良好な人間関係の構築、日常生活の自立が重要であることが明らかとなり、これらは、配偶者の死別後の生活への自信に関連していた。更に他者との人間関係、日常生活の自立は、直接あるいは間接的に準備行動に関連し、これらを支援することが配偶者の死に備えての準備を促進する可能性が示唆された。

### 主業績

No.1	
論文題目	Relationship among independence of daily living, human relationships, and preparation for bereavement among healthy elderly Japanese people
著者名	Fukutake Mayumi, Shimamura Misako, Namba Mineko, Ogino Tetsuya
発表誌名	Psychogeriatrics 印刷中、DOI: 10.1111/psyg.12526

### 副業績

No.1	
論文題目	高齢者における配偶者の死に備えての準備－夫を喪失した高齢者のインタビューを通して－
著者名	福武まゆみ、島村美砂子、難波峰子、山本直美
発表誌名	インターナショナル Nursing Care Research 第13巻第2号、31-40、2014年
No.2	
論文題目	配偶者との死別後の生活への適応 - 性別からみた生活への自信と役割の関係 -
著者名	福武まゆみ、島村美砂子、難波峰子、荻野哲也
発表誌名	岡山県立大学保健福祉学部紀要 第24巻1号、25-32、2017年

### 関連業績

No.1	
論文題目	高齢者夫婦の死に対する意識と準備状況に関する研究
著者名	福武まゆみ、岡田初恵、太湯好子
発表誌名	川崎医療福祉学会誌 Vol22、No.2、174-184、2013年

## 論文審査結果の要旨

本論文は、配偶者と死別した高齢者が、住み慣れた地域で人生の最期まで生活するための支援に資する基礎資料を得ることをねらいとして、配偶者の死に備えて準備すべき内容と、準備行動に影響する要因を明らかにすることを目的として研究した結果についてまとめたものであり、得られた成果は次のとおりである。

本論第1節では配偶者との死別後に必要な準備内容を解明するために、配偶者と死別した高齢者を対象にした面接調査が述べられている。質的解析の結果、必要な準備内容として友人や隣人との良好な人間関係の構築、日常生活での自立、が明らかにされた。

本論第2節では配偶者の死別後の生活への自信に影響する要因を明らかにするための質問紙調査が述べられている。他者との人間関係や日常生活の自立と、配偶者と死別後の生活への自信との関連を $\chi^2$ 検定等で検討した結果、健康状態のよい人、他者との人間関係がある人、また精神的に自立している人が、死別後の生活への自信が高いことが明らかにされた。

本論第3節では、高齢者における日常生活の自立、他者との人間関係、死に備えての準備の3者の関係を明らかにするため質問紙調査が行われ、構造方程式モデリングを用いて解析がなされている。その結果、日常生活の自立は他者との人間関係を介して死に備えての準備に関連していることが明らかにされた。

従って本論文では、配偶者の死に備えて準備すべき内容として、他者との良好な人間関係の構築、日常生活の自立が明らかにされ、これらは死別後の自信に関連することも明らかにされた。更に日常生活の自立と他者との人間関係は直接あるいは間接的に準備行動に関連し、これらを支援することが配偶者の死に備えての準備を促進することにつながる可能性が示唆された。本研究では、高齢者が人生の最期まで住み慣れた地域で生活できるための、配偶者の死に備えての準備を推進するために意義のある結果が示されている。

以上の結果より、学術上、實際上寄与するところが少なくない。よって、本論文は博士（看護学）の学位論文として価値あるものと認める。